

笑う賢治（２）―「ネネムの伝記」をめぐる―

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-03-21 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 秦野, 一宏, HATANO, Kazuhiro メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15053/0000000053

Copyright © JAPAN COAST GUARD ACADEMY
2019

【論文】

笑う賢治（2）
—「ネネムの伝記」をめぐる—

秦野一宏

1.

笑いにはエネルギーが充満している。日本近代文学の幕開けを告げる二葉亭四迷の『浮雲』には笑いはいっぱいあふれていた。島崎藤村や田山花袋たちの自然主義文学には笑いはいささか法度だったが、自然主義をよしとしなかった宇野浩二も芥川龍之介も井伏鱒二もみな最初は笑った。猫にしゃべらせるだけでなく、尊大な「吾輩」という人称代名詞を使わせる夏目漱石のデビュー作など、読まずとも、その題名からしてすでに可笑しい。

多くの力ある作家は笑いから出発した。宮沢賢治も例外ではない。＜新しい＞汚れない眼ですでに出来上がった世界を見ると、そこには矛盾や変なことばかり。それでも何とかその世界にもぐりこんで地位を勝ち得ようとする輩は別だが、本来の新人の出発はみな噴き出るような笑いだ。笑いは文学において、新たな宇宙の始まりを告げる爆発であるのかもしれない。

なかでも賢治の笑いは、その軽やかさ、のびやかさでは群を抜いている。「かしはばやしの夜」や「注文の多い料理店」、「北守将軍と三人兄弟の医者」なども他の作家に類を見ない笑いの一級品だが、「ペンネンネンネン・ネネムの伝記」となるともう特等品で、その笑いの力に圧倒される。主人公の名がペンネンネンネン・ネネムで、その彼が向かう町がハンムンムンムン・ムムネ（ヘンムンムンムン・ムムネとも呼ばれる！—あるいはハのつもりでへと書いたのかもしれないが）、警察長はケンケンケンケンケン、クエクなのに、奇術師は「テン、テンテンテン・テヂマア」と、「テン」が一つ足りない……。とんでもない細部にこだわりながらも、一方ではおおらかというのか、細かなことは気にしないのが賢治流だ。その子どものような感覚に、＜賢治、あばれる＞というキャッチフレ

ーズをつけたいくらいだ。

まずこの伝記の主人公の名が伸びきったゴムのようで、論文の体裁をとった本文章においては繰り返すことすらはばかれる。だからここでは便宜上、簡単にネネムと表記することにしよう。「ネネムの伝記」はネネムというばけものの生涯を描いた作品である。ばけものという小さな子どもが喜びそうだが、この物語は怪獣やばけものの好きの幼児に向けて語られているわけではない。そもそも、「伝記」の語り手がばけものなのだし、語り手が語りかけているのもばけものなのだから。—その証拠に、語り手は、功成名を遂げたネネムの豪勢な生活をこんなふうに伝える。「みなさんももうご存知でせうが、フウフイボウ博士のほかにも、誰も決して喰べてならない藁のオムレツまで、ネネムは喰べることを許されてゐました」。我々の仲間で「藁のオムレツ」を食べたい人はたぶんいないだろう。そんなヘンなものを喰べることが許可されることの意味も人間には分かりっこない。つまりは「みなさんはもうご存知でせう」の「みなさん」とは仲間のばけものたちのことで、そうであれば、語り手も人間ではありえない。にもかかわらず、この物語を我々人間が読んでいる。こここのところがじつに可笑しい。我々人間は、なぜフウフイボウ²⁾博士だけが藁のオムレツを喰べることが許されていたのか、さっぱりわからない。物語には世界長というネネムより偉い人が登場するが、このばけもの国最高権力者にも藁のオムレツを喰べる権限はないのだろうか。いや、そもそも誰がネネムにフウフイボウ博士専用の藁のオムレツを喰べることが許したのか、等々。我々の下世話な想像は縦横無尽に走り出すが、作者賢治からすれば、それはどうぞご自由にということなんだろう。あるいは作者ですら、いや、わたしもばけもの世界のことはわかるはずはありません、人間ですからと言いかねない。

童話「雪渡り」では、狐はずるく、いつも人間を騙すという人間の子もたちの抱き続けてきた先入観が、幼い子どもと子狐たちとの交流を通して覆る。この狐の子と人間の子の温かい交流があればこそ、我々読者も異空間に棲む狐たちの心に触れることができるような気がする。ところが「ネネムの伝記」には、このような異空間にいるものと人間との＜交流＞は皆

無だ。人間界へのばけものの「出現」はあるにはあるが、その出現は一方的で、人間たちに恐怖や嫌悪を呼び起こすだけだ。ばけものの世界では、人間界への出現は概ね、「ばけもの律」で禁じられている。ばけものの中には出現することそのものを喜ぶ者もいるが、その場合でも、彼らは自分だけが楽しめればよいのであって、人間と交流したいなどという思いは、これっぽっちもない。

ばけものたちからすれば、人間の世界は「向ふ」側にある。人間たちはばけものたちのことをよく知らないが、「こちら」側のばけものたちはどうやら、人間のことをよく知っているらしい。たとえば人間界に「出現」したネネムが目にしてぞっとした、ぼろきれが結びつけられた三本の竿は、チベットの「魔除けの幟」であったが、その存在についてはネネム本人も「たびたび聞いた」ことがあった。人間たちは時として、突然「出現」してくるばけものたちを見ると、恐れおののく。ばけものたちも、自分たちが怖がられる存在であることをよく知っていて、なるべく人間たちを驚かさないう、「向ふ」を「表」、「こちら」を控えめに「裏」と位置づけ、双方がうまく共存できるよう、「表」に配慮して生きている。ばけものの「出現」場所と「出現する」ばけものの種類はつながっているらしく、ザシキワラシがアフリカには現れるなんてことはない。ばけものたちと人間界とのつながりは、きわめて限定的、個人的なものである。ばけものが人間界に出現するにしても、どこに出現するかはどうやら決まっているらしい。ザシキワラシは岩手県、ネネムは「ネパールの国からチベットへ入る峠の頂」。ウウウウエイは「アフリカ、コンゴオ」。人間たちは土地固有のばけものたちが「出現」した場合に限って、姿を見ることができるが、その姿も、人間界に＜出現した＞として裁かれる。「ザシキワラシ」の例から見る限り、ばけものたちは、人間から見た姿とはかなり違っているようだ。「ネネムの伝記」のザシキワラシは「せいの高い眼の鋭い灰色のやつで、片手にはほうきを持って居」た。ザシキを掃く箒はもっているが、これは伝説によって流布した^{からい}童の姿らしくない。ちなみにウウウウエイというばけものは「鳶色と白との粘土で顔をすっかり隈取って、口が耳まで裂けて、胸や足ははだかで、腰に厚い褌のようなものを巻いたばけもの」である。き

つと彼も「出現」した姿を人間が見れば、違った姿に見えるのだろう。

佐々木ボグナは「裏」と向こう側と併記して「奥」という言葉をキーワードとして使う³⁾が、実際に作品の中で出てくるのは「表」（あるいは「向ふ」）という表現だけである。ザシキワラシは「アツレキ三十一年二月七日、表、日本岩手県上閉伊郡青笹村字瀬戸二十一番戸伊藤万太の宅、八畳座敷中」に出現、ウウウエイは「アツレキ三十一年七月一日夜、表、アフリカ、コンゴオの林中の空地に於て」出現したとある。残された草稿を見れば、「表」は「向側世界」を訂正したものであることがわかる⁴⁾。「向側世界」よりも「表」という表現のほうが、ばけもの世界から見た人間世界をよりはっきりさせることができると考えたのだろう。草稿段階を含め、ひとも「奥」という言葉が出ることはない。たしかに「注文の多い料理店」では「山奥」が異世界の出現する場になるが、それはそれである。座敷童子は言い伝えでは「奥座敷」あるいは「村の奥」に現れることになっているが、この「ネネムの伝記」においては「奥」はそぐわない。「ネネムの伝記」で重要なのは境界線である。＜内部へ深く入ったところ＞という意味をもつ「奥」では、明確な境界線は示すことはできない。「奥」では、ばけものたちが自分たちの世界に対して感じている、なにかしらの従属性を表現することはできない。世界をAとA'に分けるとすれば、ばけものたちの世界はA'ということになるのだろう。

ネネムがばけもの世界裁判長になった時、彼はばけもの世界長に挨拶に行く。世界長は「どうかしっかりやって呉れ」とネネムを励ますのだが、草稿段階では、「どうかしっかり」の前に「ばけもの世界のまことの幸福のため、又向ふがはの世界の為」という言葉があった⁵⁾。あまりにも露骨になりすぎることを嫌ったのだろうが、この一節は、人間世界を「裏」から支えるというばけもの世界の存在意義を語っていて、じつに興味深い。

人間世界とばけもの世界は表裏の関係にはあっても、上下、優劣の関係にはない。そのつながりは人間からみれば、何より心的なものだろう。三浦正雄は「ネネムにおける＜ばけもの世界＞とは、人間の潜在意識の世界を対象化したものである⁶⁾」と指摘した。わたしにはそこまでの断定はできないが、ザシキワラシもウウウエイも、あるいはネネムも含めて、人間

界に出現するだけものは、人間からすれば、自分あるいは仲間たちの
 慄く心が作り出しているとも考えられる。だけものたちからすれば、意図
 的に、あるいは足を踏み外したりして入り込む人間世界であるが、人間側
 からみれば、恐怖心その他の感情が、その感情に相応しただけものを呼び
 込んでいることになる。大正7年、3月24日前後の保阪嘉内宛の書簡にお
 いて、賢治は書いている。「誠に私共は逃れて静に自己内界の摩訶不思議な
 作用、又同じく内界の月や林や水を楽しむ事ができたらこんな良いことは
 ありません⁷⁾」。「自己内界」は内界の月や林や森を楽しむだけの場所ではな
 い。「摩訶不思議な」ことは内界にもどっさりあって、賢治はそれらも楽し
 みたかったのだ。おそらくそれが「ネネムの伝記」の発想の原点ではなかつ
 ったか。

ザシキワラシ、ウウウエイ、ネネムと、それぞれが出現する場所が違
 うのは、それぞれに対応する人間の情念、彼らを引き寄せる欲望が違うか
 らだろう。どうやらおぼけ界のメンバーは人間界ではそれぞれ特徴ある妖
 怪や精霊となって、人間たちからよく知られているのかもしれない。座敷
 を掃きたければ岩手の遠野へ行き、わいおい踊りを楽しむたければ、「ア
 フリカ、コンゴオ」だ。そして権力に酔い、慢心に浸るネネムは、「ネパ
 ールの国からチベットへ入る峠の頂」に出現し、そこに立てられていたチベ
 ットの魔除けの幟に反応してしまう。そしてやってきた巡礼の魔物退散の呪
 文に体が麻痺し、ついには気が遠くなって「ガーンと」気絶してしまう。
 あるいはネネムはチベット密教の魔物として出現したのかもしれない。

塚本春奈はネネムの人間界への出現の事例についてこう説明している。
 「ネネム自身が古生物的身体と精神的本質を併せ持った特殊なだけもので
 あったことも、＜落下＞という不自然な動きになった原因の一つであると
 言えるだろう⁸⁾」。古生物的身体と精神的本質と分ける発想は、私のこれま
 での賢治研究でいえば、形の問題に帰する。賢治の世界では、外的なもの
 （身体）だけでなく、内的なもの（本質）にも表情ある、動的な形を割り
 振られる⁹⁾。たとえば童話「狼森と策森、盗森」では、「策森」の「形」は
 山男であり、黒坂森の「形」は「巨大な巖」であった。

この外的なものとの内的なものとの形は、二つの世界にまたがっている場合

は、どちらを本体と見るかで、扱いが違ってくる。ばけもの世界ではネネムは威信ある世界裁判長という形をとっていたけれども、人間世界に出現してしまうと、チベットの魔神となる。詩「〔温く含んだ南の風が〕」（『春と修羅』第二集）で賢治は、「……そのみならず蠍座あたり／西藏魔神の布呂に似た黒い思想があつて／〔南斗の〕へんに吸ひついて／そこらの星をかくすのだ」と書き記した。巡礼たちは目の前にいるネネムが「西藏魔神」であると見て取ったので、「黒い思想」に伝染せぬよう、「地にひれふして」「何だかわけのわからない」呪文をとねえ出したにちがいない。

あるいは「ネネムの伝記」における人間とばけものの関係は、童話「鹿踊りのはじまり」の鹿と嘉十の関係に似ているのかもしれない。歓喜にあふれた鹿たちの歌と行動を見、鹿と人間の違いをつい忘れて鹿のもとへ飛び出した嘉十は、楽しさのあまり我を忘れて「コンゴオ」に＜出現＞してしまったばけもの、ウウウウエイに似る。

賢治は生涯をかけて、見えないもの、無意識的なものを形にした。森、山、岩など、賢治の描く無意識、＜見えないもの＞は数限りなくある。境界線の撤去はあらゆるものに及び、全てのものは、ありえないはずの恣意的な（賢治に言わせれば、そうとしか思えないような）＜形＞を与えられる。しかも、「ネネムの伝記」では、ザシキワラシの例からもわかるように、人間世界に出現する時の形とばけもの世界に居続けている時の形がまったく違う。要するにばけものたちの世界では、何でもありだ、何でも起こりうるのだ。

ばけもの世界では、AはAであるという公理は常に覆される。たとえばばけもの世界の森は、わらびのとれる陸地であると同時に、昆布のとれる海でもある。昆布取りの網を空に投げれば、風の中ではふかやさめが網に突き当たる。かつての地質学的時代が今も消え去っていないような時空。そこはAでありながらAではないあいまいな世界なのだ。

ネネムは「悪い方」、クラレの花咲くばけもの世界の草原の「一寸うしろのあたり、うしろと言ふより少し前の方」、つまり「人間世界」に足を踏み入れた。落下ではない。彼は人間世界では「ガツガツした岩の上」にちゃんと「立って」いる。ところが、人間世界からばけもの世界への戻りとな

ると、空から落下する。「只今空から落ちておいでゝございました」。下へ行ったと思ったら、上から現れる、一行きと帰りでは異なる、ありえない不自然な動きをしている。それだけではない。そもそも、まうしろくというよりゝななめうしろ、ぐらいという表現であれば、理解可能だが、「うしろと言ふより少し前の方」などというように、前と後ろという正反対のものを「というより」で結びつけることがそもそも、ナンセンスなんだろう。

2.

「ネネムの伝記」は周知のとおり、「グスコンブドリの伝記」、「グスコーブドリの伝記」と書き改められていく¹⁰⁾のだが、「伝記」という形式は変わらない。賢治はどうか<伝記>というジャンルにこんなにかかわったのだろう。そもそもなぜ、ばけものの伝記などを書こうと思ったのだろう。おそらく明治・大正期の立身出世のバイブルとして、サミュエル・スマイルズ著・中村正直訳『西国立志編』(1870-71年)がベストセラーになったという事情もあったのだろう。『西国立志編』の示した「貧賤の生まれであつても努力次第で何にでもなれるという社会が、一定のリアリティを帯びつつはるか彼方に羨望された¹¹⁾」時代が回顧されているのかもしれない。いったい、一世を風靡した明治・大正の立身出世主義は、賢治自身の眼にはどう映ったのだろう。あるいは通俗の極致のように映ったのではないかな。

山田兼士はこう述べている。「ネネムの立身出世＝自己確立のエピソード」は、「権威、人望、野心、名声といった社会的符丁をとまなう一個の独立した人格を自身の未来像として描き出している¹²⁾」と。山田によれば、賢治は「ネネムの伝記」において<子どもが大人になることを願望する>という流れの中で自身の未来像を描き出しているのだが、結局、大人になることを放棄したために、この作を「グスコンブドリの伝記」へと書き換えたことになる。しかし、賢治はすでに「ネネムの伝記」で通俗的な「立身出世」の末路を完膚なきまでに嗤っている。肯定的な像であればまだしも、さんざん揶揄され、笑われているものを賢治が自身の肯定的未来像にしているなんてありえないだろう。「ネネムの伝記」が描く未来、—それは賢治にとっては「魔」に魅入られて陥る可能性を秘めた、いわばマイナスの未

来である。心して生きなければ自分も知らずにはまりこむ可能性のある、恐ろしい未来図である。

賢治には当初から、社会的成功者の生涯を描く大仰な伝記というジャンルそのものをばけものを使ってパロディ化してみたいと思いがあったにちがいない。飢饉で苦しむ少年が森での10年の辛い雌伏期間を経たのちに、花の都へ出て学問を積み、スピード出世し世界裁判長になったはいいが、最後は「安心」し、慢心して道を踏み外す、という筋立ての中で＜立身出世主義＞を哄笑の中に放り込みたかったのではないか。

ネネムは飢饉で父母と死に別れ、また妹とも生き別れになるという体験をする。妹はまだ体が柔らかい、「膝やかかとの骨が固まってしまってる」ということで、テヂマア率いる奇術団に連れていかれる。その後、ネネムはばけもの紳士に昆布取りとして雇われた。基本給は一ドルであるが、食費（ばけものパン代）として一日1ドル差し引かれるというので、それ以上稼がなくては利益が出ない。雇い主が出した条件は、一日10斤以上昆布を取れば、一斤10セントで引き取るということなので、ほんとうに日に一ドル稼ごうとすれば、昆布を十斤ずつ取りつづけねばならない。しかも取る昆布が10斤に足りなかったら、食費に達しないので、どうしてもパンを食べたいならその足りない分はネネムの借りになるという。この徹底的に搾取された過酷な労働条件の中、ネネムは10年間働きとおした。はじめの4年は技術が未熟なせいで、毎日借金ばかりしていたが、次の5年でその借金を払い終え、最後の3ヶ月でようやく300ドルのお金がたまる。月100ドル、日に換算して33ドル33セント、つまり、熟練労働者となった3ヶ月間で340斤ほどの昆布を取ったことになる。金のやり取り、稼いだ金の動きによってネネムの生活、あるいは成長までが見えてくる。ネネムはその金をもって森を後にし、ばけもの世界の町ムムネへ向かう。

しかし、苦勞して得た熟練の技はもう使い道がない。別役実が指摘するように、昆布取りの10年は、苦勞はしたが、「修業期間」とは言えないのだ。何故なら、「それはそのまま直線的には、ムムネ市の活躍につながっていないからである¹³⁾」。苦勞は報われるというような世間的金言の入り込む余地もない。そもそもネネムに、抱くべき大志がない。大志どころか、彼

には自分はこれをしてほしいという明確な意思すらない。＜立身出世＞は目指しても、＜あこがれ＞の職業に就こうというわけではない。改作された物語の主人公ブドリと同じく、ネネムにも、どんな環境でも生きていこうとする生命力はあるのだが、ネネムには、ブドリの持つ内発的な生きがいのようなものがない。あるのは楽をしたいというささやかな願望だけである。

実際、昆布取りに明け暮れる生活はじつに過酷なものであった。ネネムはばけものパンを得る代わりに、はしごを取り上げられて木から降りもできず、枝の上で直立し続けるという辛い労働を強いられる（職場から逃亡することもできないのだ！）。そのような監獄部屋の、たこ部屋的な劣悪な環境の下で強制労働をさせられていたのは、ネネム少年だけではない。「向ふの木の上の二人もしょんぼりと頭を垂れてパンを食べながら考へているやうすでした。その木にも鉄のはしごがもう見えませんでした」。この二人は労働の過酷さに耐えきれずに「消滅」してしまったようだ（「きっとあんまり仕事がつらくて消滅してしまったのでせう」）。人間界なら自殺したか、病死してしまったということになるのか。ネネムは、こうした飢饉のせいで両親を亡くし、自身の労働で暮らさざるを得なくなった大勢の子どもたちの生き残りなのだ。ただ、ネネムが耐えて＜立身出世の道＞を歩むことができたのは、消えた二人を目の当たりにして、自分は「消滅」したくないと強く「決意」したためにほかならない。

ムムネ市に向かう途中、無暗にぎらぎら光る鼠色の男が、「赤いゴム靴」をはいてネネムの方にやってくる。そしてネネムをじろじろ見ていたが、突然そばに走って来て、「ネネムの右の手首をしっかりとつかんで」こう言う。「おい。お前は森の中の昆布採りがいやになってこっちへ出て来た様子だが、一体これから何が目的だ。これはきっと探偵にちがいないと思ったネネムは堅くなって、「書記が目的であります」答える。

するとその男は左手で短いひげをひねって一寸考へてから云ひました。／「ははあ、書記が目的か。して見ると何だな。お前は森の中であんまりばけものパンばかり喰ったな。」／ネネムはすっかり凶星をさされて、面くらって左手で頭を搔きました。／「はい実は少少たべすぎたかと存

じます。」／「そうだらう。きっとさうにちがいない。よろしい。お前の身分や考へはよく諒解した。行きなさい。わしはムムネ市の刑事だ¹⁴⁾。」

刑事の身分の開示が別れ際になされていることに注意したい。無暗にぎらぎら光る鼠色のこの男の鋭い眼光。自分の身分も明かさず居丈高に「お前」言葉で話すあたり、当時の警察官が下敷きにされているのだろうか。ばけもの世界の「首府」ムムネ市には、日本の首都東京が重ねられているのだろうが、刑事が職務尋問しているのはムムネ市の中ではないことに注意すべきだ。いったい彼は何をしているのだろうか。

地方（森の中）から都市への移住は、江戸時代とは違う、まさに明治・大正期の特徴的な動きである。犯罪者を「首府」に入れないというだけのことであれば、もう少し違った職務尋問をするはずだ。興味深いのは、彼がネネムに、まずムムネ市に入る「目的」を尋ねていることである。どうやらこの男の最大の関心は、「首府」に入ってゆこうとする人々の＜思想＞ではないのか。幸徳秋水たちが捉えられ、死刑に処されたの大逆事件は1910年のことだった。あるいは、世界長（身のたけ百九十尺もある中世代の瑪瑙木）に反逆するような事件が、ばけもの界でもあったのかもしれない。

ネネムが高圧的な職務尋問から解放されたのは、ムムネを目指すのは「書記」が目的だと答えたからだ。書記は具体的には、おそらく官吏を指すのだろう。役人社会では『浮雲』（明治20年～22年）や『舞姫』（明治23年）にも示されているように、出世が大きな関心事になっていた。明治・大正期において楽で、＜出世が目指せる＞職業はまさに、官吏であったのだろう。

ネネムが「書記」になりたいと答えたのは、刑事の考えによると、彼が「森」でばけものパンをたらふく食べてきたからだ（ちなみに「この地方の飢饉を救けに來たもの」と名乗ったテデマアからネネムたちがもらったパンは「葡萄パン」である）。ネネムは、過酷な労働に嫌気がさした結果、「書記」を目指しているだけで、政府を転覆させようなどというような不遜な「考へ」は抱くわけがない、思想上、危険性はないと見做されのたろ

う。いや、危険性がないどころか、身分秩序を破壊するものとして現れたく立身出世>の考えは、むしろ新政府によって奨励されていたのだろう。

「行きなさい。わしはムムネ市の刑事だ」という最後のせりふには、一歩間違えば、お前は引っ張られていたんだぞというニュアンスがある。

職業の選択にあたって、ネネムは人々の救済や社会への貢献についてはまったく考えなかった。彼はエゴイストというわけではないが、どこまでも自身の「独立」に執着する。意志は強く、前進するためのエネルギーは有り余るほどもっている。

ネネムは肉体労働者をやめ、書記になりたかった。問題は両者を橋渡しする「学問」である。福沢諭吉も、「身分重くして貴き者」も「その本を尋ねればただその人に学問の力あるとなきとに由ってその相違も出来たるのみ」と述べている¹⁵⁾。どうやらネネムは諭吉の信奉者の体である。ただネネムの場合、「学問」が明確化せず、「何か」がついて、具体性がまるでないところに注意すべきだろう（「何か学問をして書記になりたいもんだな」）。これとしてしたいことはないけれど、とりあえず、楽して生きることができるよう社会的に通用する<学歴>をつけておこうか、といった発想である。ネネムにとって「学問をする」ことはそれ自体価値あることではなく、将来独立し、立身出世をするための必要条件にすぎない。以後、希望通り、ネネムは、フッフィーボー博士のもとで<学問>し、その後、ものすごいスピードで、自分の力を拡大してゆく。といっても努力とは無関係のベルトコンベア式にはあるが。

3.

ネネムの受けた「学問」とはどういうものであったのか。彼に「学問」を授けたフッフィーボー博士の講義は、具体的にどんなものであったのか。たとえば博士は講義で、こんなことを述べている。

それでその、もしも塩素が赤い色のものならば、これは最も明らかな不合理である。黄色でなくてはならん。して見ると黄色といういふ事はずぬぶん大切なもんだ。黄といふ字はかう書くのだ。

三浦正雄はこの引用部分を評して、「“考える”ということからほど遠く、字の練習のようなこの授業は、法則や理論が最も重い価値をもち、世界を動かしようという教育の神話を崩壊させ、理知を無化している¹⁶⁾」と述べている。たしかに字の練習のようなばかげた授業だが、思うに、ここにあるのは「法則や理論」の軽視といった大仰な教育の問題ではなく、愉快的論理の遊びではないか。なぜ塩素が赤ならば不合理なのかは触れられないのがまず可笑しい。「して見ると」という論理をよそおったつなぎで、文章は破綻する。黄色でなくてはならないことが、黄色が大切ということにはならない。＜論理の峻厳＞はみかけだけで、この論理運びはなんにでも適用できる。人間は四足歩行ならば不合理だ、二足歩行でなければならない。

「して見ると」二足歩行ということは大切なことだ。二足歩行とはこう書く、等々、同パターンでいくらでも続けられる。

さらにもう一つ博士の講義の中の言葉として、こんなものがある。「何が故に夕方緑色が判然とするか。けだしこれはプウルウキインイイの現象によるのである。プウルウキインイイとはこう書く」。『定本 宮澤賢治語彙辞典』では、この現象を「視野の輝度が小さくなるに従ってスペクトルの青領域の比視感度が黄赤領域に比べて上昇する現象」と説明されているが、本来、こうした科学的説明こそ、博士が行わなければならないものであったのではないか。「夕方緑色が判然とする」のを「プウルウキインイイの現象」と呼ぶと言われても、それは結局、「夕方緑色が判然とする」という言葉の言い換えにすぎない。博士は説明抜きで、あとは「プウルウキインイイの現象」という言葉そのものをタームとして学生の頭に刷り込むように、「みみづのやうな横文字を一ぺんに三百回ばかり」書くだけだ。きっと学生たちも敬愛する大先生にならって、先生お勧めの重要な用語を「三百回ばかり」書き写し続けるのだろう。そして、丸暗記する。おそらく学生たちの頭の中には、こうした丸暗記した専門用語があふれんばかりに詰め込まれているのではないか。

どうやればもの国の教育の基本は、先生の板書をそのまま、忠実にノートに書きとることのようである。ネネムがノートを出した時、フウフィ

一ボー博士は大きなあくびをして、ノートをスポリと吸い込んでしまう。博士はそれを別段気にかかるでもないらしく、コクツと吞んでしまっ、
「よろしい、ノートは大へんよくできてゐる」と、その出来のよさを褒めた。博士の体内にデータが入ると、それらはすぐに精査され、評価が出る。まるでコンピュータの＜処理＞だ。あとは煙の種類、の形を答えさせるばかりの口頭試験で終了。のちにネネムがブドリに変わると、その煙に関するうんちくは、火山を調査する職業と深く関わることになるが、ネネムの段階では、ナンセンスな試験だ。口頭試験も首尾よく通ったネネムは、当日の試験の「一等」を勝ち取り、思いがけず、最良の就職の口を得る。「賢人と愚人との別は、学ぶと学ばざるとに由って出来るものなり」という福沢諭吉の言葉が思い起こされる¹⁷⁾。フウフィーボー博士の場合、「学ぶ」とは、板書をノートに写すことを指すのだろう。

権威あるフウフィーボー博士の試験に合格するや、博士の推薦でネネムは「書記」のトップ、「セム二十二号」に居をもつ世界裁判長に就任する（セムは旧約聖書「ノアの箱舟」の「ノア」の息子の名に由来するのかもしれない¹⁸⁾）。こうした一連の場面は明治・大正期、立身出世の方法として特に教育—それもまったくの薄っぺらな教育—が置かれていたことへのパロディだろう。

能力を判別する試験があれば当然、不合格者が出てくるが、「ネネムの伝記」では、不合格者もパロディ化を免れない。試験に合格することのできなかった大勢のばけものの運命は苛烈である。合格して喜ぶエリート、ネネムの周囲には、「全く三千六百五十三回、則ち〔閏〕年も入れて十年といふ間、日曜も夏休みもなしに落第ばかりして」泣いているばけものたちであふれていた。このように、「愚人」とレッテルを貼られる人々の悲しみの光景をしっかりと視野に収めているのが賢治なのだろう。愉快なのは、「及」とか「落」とか「退校」に加えて「同情及」という評価があることだ。ただ「同情」で通すことがあったとしても、フウフィーボー博士の試験が落とすことに主眼があることには変わりはない。のちにグスコブドリが受けるクーボー大博士の試験からは「落」や「同情及」「退校」がなくなり、その代わりに、「再来」、「奮励」が現れる。「落」と告げられるか、「奮励」

と告げられるか、その意味するところは同じかもしれないけれど、受験者の受け取り方はまったく異なるのではないか。「ネネムの伝記」の試験は、その冷たい評価語からもわかるように、どこまでも落とす試験（選抜試験）である。

ネネムは試験（「学問」）の難関を潜り抜けた。とはいえネネムは他の大勢の受験者のように、必死で合格をめざしていたわけではない。彼らが必死になるのは合格の向こうに出世が待ち受けていることを知っているからだが、ネネムはそんな思いはない。彼は偶然、試験を受け、合格し、結果、＜立身出世システム＞の中に取り込まれてしまっただけなのだ。

ネネムは「何か学問をして」書記になりたいものだと考えてただけで、世界裁判長のような栄えある地位をめざしていたわけではない。書記とは、記録などを残すために文字を書き記す職業の言葉だが、要は「なげるやうなたぐるやうな」肉体労働がいやで、ホワイトカラーになりたかったのだ。この点でもネネムは特別なわけのものではない。ワン・オブ・ゼムだ。同じような志を持つわけもののうちの一人にすぎない。たとえば物語の中では、ダブルイメージとして、フウフィーボー博士と出会って、結果、警察署長になったクエクの話が入れ込まれている。農家の息子クエクは大学校の小使室に用事で出向き、そこでフウフィーボー博士の講義を聞く機会を得た。その後、博士の出した試験に合格し（彼はネネムと違い、合格まで「三日といふもの、聴いたり落弟したり、考へたり」したが）、ネネム同様、即座に書記職を得た。クエクもまた、福沢諭吉が勧めたように、学問によって、固定化したブルーカラーの身分から脱出したのである。

合格したネネムは、訪問先の番地を博士に胸に書いてもらって、その場所を訪ねてゆく。行き道を通りがかりの者に聞くと、そこは世界裁判長官邸であることがわかったが、ネネムはまさか自分自身が世界裁判長であるとは思わない。その世界裁判長邸でのとぼけた会話を引用すれば—

「私は大学校のフウフゑィボウ先生のご紹介で参りましたが世界裁判長に一寸お目にかゝれませうか。」／するとみんなは口をそろへて云ひました。／「それはあなたでございます。あなたがその裁判長でございます。」

／「なるほど、さうですか。するとあなた方は何ですか。」

ネネムはあなたが裁判長だと告げられても少しも驚かず、あたりまえであるかのように平然と受け入れる。それだけではなく、「すると」あなた方は何者かと、当然のなりゆきのごとく問いかける。これほど人を喰った言葉はない。ばかばかしいほどの軽さがなんともいえず、楽しい。しかも行うべき裁判はもう目の前に控えているという。「今晚開廷の運びになってゐる件が二つございますが、いかにございませうお疲れでゐらっしゃいませうか」と「部下」（「判事や検事やなんか」）が問いかける。その答えは「いいや、よろしい。やります」であるが、この時点ではもちろん、ネネムは司法制度においてまったくの素人で、どのように裁判を進めていけばいいのか、その根本のところはわからない。しかしわからないことは聞けばいいということで、ネネムは「裁判の方針はどうですか」と尋ねかける。すると部下の一人がこう教えてくれる。「はい。裁判の方針はこちらの世界の人民が向ふの世界になるべく顔を出さぬやうに致したいのでございます」。それだけで裁判の方針をつかんだネネムは「わかりました。それではすぐやります」と答える。どうやら「書記」の仕事においては、上司は優秀な部下たちのレクチャー通りに動けば、それだけで十分なのだ。方針を示す「なるべく～したい」という表現が、正確さ、その枝葉末節にまでこだわる裁判というものの本来的な厳格さに矛盾しているように受けとれるが、そもそもこのばけもの世界では、裁判そのものの根底を支える「ばけもの律」が厳密ではないのだ。「げにも、かの天にありて濛々たる星雲、地にありてはあいまいたるばけ物律、これはこれ宇宙を支配す」というフウフィーボー博士の言葉が思い起こされる。不可解なものこそが宇宙を支配しているということなのだろう。

このばけもの律はこれまでも指摘されているように、カントの『実践理性批判』の「結び」の一節をパロディ化したものである¹⁹。『実践理性批判』の「結び」にはこう記されていた。

ここに二つの物がある、それは—我々がその物を思念すること長くか

つしばしばなるにつれて、常にいや増す新たな感嘆と畏敬の念とをもって我々の心を余すところなく充足する、すなわち私の上なる星をちりばめた空と私のうちなる道徳的法則である²⁰⁾。

カントは「星をちりばめた空」を第一の景観、「うちなる道徳的法則」を第二の景観と呼んで区別し、第一の景観は「動物的被創造者」としての自分を自覚させ、「私」の重要性を否定するが、第二の景観は「私の人格性を通じて」、「叡智者」としての「私」の価値を無限に高めると主張する²¹⁾。これは「ばけもの律」とはかなり違う。フウフィーボー博士の言葉のおもしろさは、ばけもの界にも道徳律はあるが、それは絶対的なものではないという単純な内容に、重々しい調子でカント的な権威をよそおわせているところにある²²⁾。このことは、「ばけもの律」を語る時の博士の、効果的身振りとも符合する。博士は「ばけもの律」を語る時は「俄かに手を大きくひろげ」、「テーブルの上に飛びあがって腕を組み堅く口を結んできつとあたりをみまは」すのだ。

ばけもの律は究極的にはあいまいだが、しかしそれにしても、法律の実際の審理を進める手続きになると実に細かく、法律文に独特のいかめしさが強調されることになる。

たとえばザシキワラシを裁く裁判はこんなふうに始まる。

一人の検事が声高く書類を読み上げました。／「ザシキワラシ。二十二歳。アツレキ三十一年二月七日、表、日本岩手県上閉伊郡青笹村字瀬戸二十一番戸伊藤万太の宅、八畳座敷中に故なくして擅に出現して万太の長男千太、八歳を気絶せしめたる件。」／「よろしい。わかった。」とネネムの裁判長が云ひました。／「姓名年齢、その通りに相違ないか。」「相違ありません。」／「その方はアツレキ三十一年二月七日、伊藤万太方の八畳座敷に故なくして擅に出現したことは、しかとその通りに相違ないか。」／「全く相違ありません。」

やたら詳細なところ、無意味な繰り返し、必要以上に厳密さを追求する

ところは、まさにザ・法律文だ。「アツレキ」とはよくわからないが、「蜘蛛歴」(童話「蜘蛛となめくちと狸」)のようなものなのだろう。「アツ歴」と漢字混じりで記されていないので、何かしら音から<軋轢>を想起させる。「裏」であるだけものの界は、「表」である人間界あつてもものだが、その裏表の関係が「アツレキ」となっている、—そんなほのめかしなのだろうか。

さて、新人の世界裁判長が最初の仕事において、ザシキワラシに言い渡した判決はこうだ。「本官に於て大いに同情を呈する。しかしながらすでに妄りに人の居ない座敷の中に出現して、簾の音を発した為に、その音に愕ろいて一寸のぞいて見た小さな子供が気絶をしたとなれば、これは明らかな出現罪である」。もしも相手が気づかなければ、そして、人間界に現れたことが人間たちにとって公益となる、それだけものであれば、たとえ世界長の許可なく出現しても、その行為は「出現罪」とは認定されない。むしろ、「向ふがはの世界の為」になされた行為は推奨されてもいいくらいだ。つまるところ、「出現」が「罪」になるのは、「表」側の人々の気持ちよりも、自身の感情を優先させたことにある。自身の感情のまま、自由に動けないとは、辛い話だ。

ネネムはザシキワラシに対しては、「依って」今日より七日間当ムムネ市の街路の掃除を命じた。出廷しているのが被告人本人であることを確かめる通り一遍の人定質問、「本官に於て」など、もって回った堅苦しい言い方などはそれなりに理由があるのだろうが、このようにばけもの世界で再現されると、異様な、裁判所独特のばかばかしい儀式、あるいは権威付けに見えてくる。また、「出現罪」などというばけもの世界の犯罪を発想する作者の想像力には舌を巻く。

もう一人の被告ウウウエイという化け物は「アフリカ、コンゴオ」の林中の空き地に「故なくして擅に出現、折柄月明によって歌舞、歌をなせる所の一群を恐怖散乱せしめた」罪で裁かれる。「よろしい。何の目的で出現したのだ。既に法律上故なく擅となつてあるが、その方の意中を今一応尋ねやう」とネネム裁判長が問いかけると、ウウウエイはこう答えた。

「へい。その実は、あまり面白かったもんですから。へい。どうも相済み

ません。あまり面白かったんで。ケロ、ケロ、ケロ、ケロロ、ケロ、ケロ」
—同じ内容のことがこれほどまでに違った表現を持つことに、驚きを禁じ
得ない。ここではいかめしいもの、硬直したものが徹底して笑われる。こ
こでは謹厳実直な法律用語も虚仮にされている。「故なく」「擅（ほしいま
ま）」「妄りに」といった使用頻度の高い法律用語があちらこちらにちりば
められる。しかし「故なく擅」という堅苦しい漢語は＜感情の赴くままに
＞ということで、もっと砕けば、「その実は、あまり面白かったもんですか
ら」と軽い日常の口語で言い換えられる。相手が恐怖することを考えずに、
ただおもしろいという感情の命じるままに出現することはまさに「ばけも
の律」に違反することとなる。

4.

森を出て首府ムムネに出発した日のネネムの一日には、おそろしくたく
さんの出来事がぎっしりと詰め込まれている。自分を息子と勘違いしたば
けものおかみさんとの出会い、刑事の職務質問、ムムネ到着。そこでフ
ウフィーボー博士の講義に出席し、試験でお墨付き（学歴）をつけてもらい、
就職を世話される。セム二十二番地では判事たちの出迎えに遭い、自分が
とんでもなく出世し、一挙に世界裁判長に座ることを知る。そして間髪を
置かず、最初の仕事（公判）が始まり、判決を下す。裁判が終わると、フ
ウフィーボー博士がやってきて、窓から顔をのぞかせ、みなに、自分の選
んだ裁判長はいいだろうと、自慢気に語りかける。—これだけのできごと
が、たったの一日の中に収まる。ドストエフスキイの『白痴』や『カラマ
ーゾフの兄弟』の物語の時間を思わせるような濃密な時間だ。あるいは＜
子どもの時間＞と言ってもいい。子どもは一日がすごく長い。次から次へ
と初めての体験が続くからだ。ネネムの場合は十年一日の昆布取り生活の
あとであったからこそ、まさに＜子どもの時間＞を体験できたわけである。
その一日は、昆布取り 10 分分に匹敵すると言ってもいい。「あととはあした
のことです」という、ようやく一息ついたかのような語り手の言葉が、と
てつもなく長い一日が終わるという気分を醸し出している。

次の朝は 6 時に起きて、その日の公判が晩の 7 時から二件入っているこ

とを検事から知らされると、ネネムはさっそく「巡視」に出かける。濃密な時間はこの日も含めてしばらく続くが、次には緊迫からの解放とも言うべき休息の時間、「安心」の時間が来る。

ネネムの「安心」の段階が、「巡視」のすぐあと、「出現」のすぐ前だということは示唆的である。「[一、ペンネンネンネンネン・ネネムの独立²³⁾]

「二、ペンネンネンネンネン・ネネムの立身」「三、ペンネンネンネンネン・ネネムの巡視」「四、ペンネンネンネンネンネネムの安心」「[五、] ペンネンネンネン [ネン、] ネネムの出現」というように、「安心」は生の重要な一つの段階を示すものとして章題にも使われていた。

部屋中が勲章だらけになるくらい偉くなり（勲章は他からの称賛を意味する）、大博士以外食べてはならない「藁のオムレツ」まで食べることが許されても、ネネムは一向面白くなかった。それは八つの時飢饉の年にさらわれていった妹のことが「一寸も頭から離れなかった為」である。「安心」は、長年の懸念であったこの妹のマミミが見つかり、自分のもとに連れ戻すことができたことを示している。「グスコープドリの伝記」では、農家の主婦になり平凡な幸せを掴むことになる妹（ネリ）だが、「ネネムの伝記」では、妹（マミミ）はテヂマー座の華やかなトップアイドルになっていた。

さらわれた妹、その身の上をずっと案じ続けてきた妹が幸せになっているなんて、ちっとも＜らしい＞物語ではない。かつて漱石は筋らしい筋を持たない小説を書きたいと考えたことがあったが、まさにここには＜筋らしい筋＞がない。ここには通常あるはずの、兄と妹の涙の再開の＜物語＞がない。無理やり奇術団のようなものに入れられてさぞかし苦労したかと思いきや、なんとマミミは「スタア」になっていた。そしてマミミ自身、そのことに大いに満足しているようにみえる。まるで天邪鬼が仕組んだかのようなのだ。

うしろのまっ黒なびらうどの幕が両方にさっと開いて顔の紺色な髪の毛のやうなきれいな女の子がまっ白なひらひらしたきものに宝石を一杯につけてまるで青や黄色のほのほのやうに踊って飛び出しました。

演じているのが妹だと知ったネネムは、「マミミ。マミミ。おれだよ。ネネムだよ。」と声をかけ、舞台に上がる。女の子はぎょっとしたようにネネムの方を見る。「それから何か叫んだやうでしたが声がかすれてこっちまで届きませんでした」。兄妹が涙ながらに抱き合うシーンはあったのかなかったのか。いずれにせよ、ここでテヂマアが幕の後ろから現れて、兄妹の出会いの感動を寸止めにしている。「さわがしいな。どうしたんだ。はてな。このお方はどうして舞台へおあがりになったのかな」と、テヂマアはネネムに問いかける。

ネネムはその顔をじっと見ました。それこそはあの飢饉の年マミミをさらった黒い男でした。／「黙れ。忘れたか。おれはあの飢饉の年の森の中の子供だぞ。そしておれは今は世界裁判長だぞ。」

ネネムは「世界裁判長」を前面に出して、けんか腰で突っかかる。しかし、世界裁判長の世間的威光は座長のテヂマアにはまるで通じない。「それは大へんよろしい。それだからわしもあの時男の子は強いし大丈夫だと云ったのだ。女の子の方は見ろ。この位立派になってゐる。もうスタアと云ふものになってるぞ。お前も裁判長ならよく裁判して礼をよこせ」。テヂマアは謝らない。金を支払えとも言わないし逃げもしない。自身のかつての行動を恥じることなく、堂々とした態度でこう言う。「いいとも。連れて行きなさい。けれども本人が望みならまた寄越して呉れ」。「連れて行ってください」「寄越してください」といった丁寧語はまったく使わず、世界裁判長という権力者におもねるところか、毅然とした命令口調で対している。そして本人が望みなら戻すようにとの言葉は、自分はマミミを大切に扱ってきたという自信に満ち溢れている。その堂々とした態度を評して、語り手はこんなふう言う。

どうです。たうたうこんな変なことになりました。これといふのもテヂマアのばけもの格が高いからです。／とにかくそこでペンネンネンネンネン・ネネムはすっかり安心しました²⁴⁾。

ばけもの格とはもちろん、カントが重要視し、大正期の知識人を取りこにした「人格」概念のばけものヴァージョンである。そこには、カントの人格概念を中心にかまびすしく議論された当時の人格論争が反映されているのだろう²⁵⁾。

テヂマアだけではない。テヂマアの率いる一座も格が高い。—「オキレの角はカンカンカン／ばけもの麦はベランベランベラン……」。座員の役者たちが歌うこの「ばけもの世界の農業の歌」は種まきから、立派な穂をつけ、刈り取りに至るまでの燕麦の豊穡を祝う歌である。

「おキレの角はケンケンケン／ばけもの麦はザランザララ／とんびトーロトーロトー、／鎌のひかりは シンシンシン」とみんなは足踏みをして歌いました。たちまち穂は立派な実になって頭をずうっと垂れました。黒いきもののばけものどもはいつの間にか大きな鎌を持ってきてそれをサクサク刈りはじめました。歌いながら踊りながら刈りました。見る見る麦の〔束〕は山のやうに舞台のまん中に積みあげられました。

その姿は飢饉に対する祈りのようにも聞こえる。どうやら、テヂマアが飢饉の折に兄妹のもとにきて、「この地方の飢饉を救けにきたもの」だと言った言葉は嘘ではなかったのである。この収穫の歌のあと「おキレ」（太陽）のおかげで「ザックザック」とれた黄色な麦粒の小山が出現し、次にはそれは磨臼にかけられる。つまりこの麦の収穫を祝う農業歌は「おキレ」を礼讃した歌でもあるのだ。

一方、「飢饉の子供」であったネネムはと言えば、「おキレ」に感謝するどころか、飢饉のことなどたと忘れて、自分はずいぶん「おキレ」と並ぶまでに偉くなったと過信する。ネネムが「オキレ」に言及する歌を歌うのは、自分も「オキレ」なみの力があることを顕示するためなのだ。

その威オキレの金角とならび／まひるクラレの花の丘に立ち／遠い青
 びかりのサンムトリに命令する。／／青びかりの三角のサンムトリが／

たちまち火柱を空にさへげる。

この「オキレ」をめぐる歌はテヂマアの一座が歌う「オキレ」の歌とは、まったく質が違う。まるで品格がない。

まったく奇妙奇天烈な世界だ。妹をさらうという悪事を働いたはずのテヂマアの「ばけもの格」が、人望があり皆から賞賛される主人公ネネムの「ばけもの格」より高いというのだから。まるであべこべ世界だ。テヂマアを囲む一座の人々と、世界裁判長の肩書におもねるネネムの 30 人の部下たちも対照的だ。

長年の懸念であった妹も見つかると、ネネムはもう心乱れることもなく、安心して自身の権威の座に居座ってしまう。勲章はわんさかたまり、名声の高まりとともに、「全くご明察の通り」が口癖の取り巻き連が、いよいよネネムの自尊心をくすぐる。「…ネネムは独立もしましたし、立身もしましたし、巡視もしましたし、すっかり安心もしましたから、だんだんからだも肥り声も大へん重くなりました」。離れ離れになった妹のことが解決してしまうと、もう自分のこと以外に関心がなくなってしまった。順接の接続助詞「～から」に注意したい。「安心」してしまうと体が太るだけでなく、声まで重々しくなる。そのもったいぶった態度に周囲はおびえ、あれこれと忖度がはじまる。そして、もう何も言わなくとも、自分の思い通りになるという＜超自然的な力＞を得ることになる。裁判でももう言葉はいらない。——「大抵の裁判はネネムが出て行って、どしりと椅子にすはって物を云はうと一寸唇をうごかしますと、もうちゃんときまってしまうのでした」。そのうち、本人すらいらなくなってしまうだろう。そのいかにも＜本当らしい＞ばかばかしさがたまらない。

こうして「安心」は「出現」を準備する。「安心」は章題の付け方からも窺い知れるように、「独立」、「立身」、「巡視」、「出現」と並んで、生の段階を示すものとなっている。生の段階といえ、ニーチェのツァラトゥストラが「精神」には「三段の変化」があると説いていることが想起される²⁰⁾が、「ネネムの伝記」でも「ニイチャの哲学」を持ち出す賢治のことだ、もちろん、そのことは知っていただろう。

ツァラトゥストラによれば、生は、孤独の極みの中で重荷に耐える「駱駝」の段階、自由のために戦い、精神の在り方を「汝なすべし」から「われ欲す」に転換する「獅子」の段階、そして、新しい始まりである、無垢な「幼な子」の段階という「三段の変化」がある。賢治の描いたものはおそらく、そのパロディなのだろう。ひたすら耐えた、十年にわたる昆布取りの「独立」した暮らしが駱駝期に相当するとすれば、「立身」と「巡視」は獅子に関係づけられようか。書記になるという志をもってムムネ市にやってきたネネムは見事、立身出世し、世界裁判長の椅子に座ることになった。裁判長はもちろん「ばけもの律」に従って裁くわけだが、「巡視」におけるフクジロ事件をめぐる裁きは、「汝なすべし」から「我欲す」への転換点をなしている。その転換点を示すフクジロ事件とは一。

フクジロは自身の＜近寄りがたいおぞましさ＞を押し売りの道具として利用して、「十円」という高い値でマッチを買わせるわけだが、彼はそれを自分の意志で行っているわけではない。フクジロは他のばけものに強制されて押し売りし、そのばけものも別のばけものに監視、強制させられている。そのばけものがまた別のばけものに……、というわけで、責任の所在がわからなくなっている。ばけものたちはそれぞれ、前の者に金を貸しており、その利子を取る。あとになるほどに、利子としてとりたてる額も膨れ上がる。11人目以降は、もはやフクジロがマッチを売っていることすら知らずに、順番のひとり前のばけものから金を取り立てていた（金さえ入ればそれでいいのだ）。前の者から取り立てる最後の「緑色のハイカラな」（後ろのばけものほど、手にした儲けのおかげでハイカラになる！）ばけものは、こう説明する。「私はそんなこと（悪いこと）をした覚えはない。私は百二十年前にこの方に九円だけ貸しがあるので今はもう五千何円になっている。わしはこの方のあとをつけて歩いて毎日、日づで三十円ずつとる商売なんだ」。

これはもちろん、これは上位の者が底辺の者に＜仕事＞を押しつけ、罪の意識もなく、富を吸い取る近代的なシステムのパロディだ²⁷⁾。ネネム裁判長は自身の＜正義の裁き＞によって、フクジロに連なるばけものたちの一群に立ち向かい、「みんなが悪い」と結論づけた。「かあいさうだから」

とだれの罪も問うことなく、世界裁判長の権威によって、悪の連なりを断ち切るように命じた。これは法律にとらわれることなく、自身で自由に判断を下した結果である。読者からすれば、このように大岡裁き>はその後のなりゆきが懸念されるあやうい<判決>であるが、ネネムが自身の頭を絞りを、真剣に悪と戦ったことはまちがいない。

ただネネムにあっては、「巡視」のその先が違う。ネネムの人生（ばけもの生）には、ツァラトゥストラの言う<新生>を可能にする創造的な「幼な子」の段階はない。「幼な子」の段階は、自己満足の行き止まりである「安心」の段階に置き換えられている。「安心」は純粋な始まりではなく、終わりの始まりである。「安心」は心中に渦巻く慢心を増大させ、ネネムを「出現」へと追いやる。

この「安心」から「出現」に移るきっかけを、賢治はサンムトリ火山の噴火をめぐるエピソードを用いて見事な、そして愉快的タッチで描いている。

事の発端はネネムが最初、自らの科学的計算から導き出してサンムトリ火山が噴火すると予言したことにある。—「僕の計算によると、どうしても近いうちに噴き出さないといかんのだがな。何せ、サンムトリの底の瓦斯の圧力が九十億気圧以上になってるんだ。それにサンムトリの一番弱い所は、八十億気圧にしか耐えない筈なんだ。それに噴火をやらんといふのはおかしいぢやないか。僕の計算にまちがひがあるとはどうもさう思へんね」。厳密に言えば、これは予言ではない。ネネムは、火山の底のガスの圧力と地盤の弱いところを科学的に「計算」すると、「どうしても」近いうちに噴き出すと言っただけなのだ。上席判事やみんなも、「えゝ」と「一緒にうなづい」た。ところがネネムの指摘した通りに実際に噴火が始まると、上席判事は科学的計算にはあえて触れることなく、自身の上司に媚びを売る。「裁判長はどうも実に偉い。今や地殻までが裁判長の神聖な裁断に服するのだ」。「計算」を「神聖な裁断」と言い換えた上席判事に続いて、「二番目の判事」も負けじと、歯が浮くような文句でネネムを持ち上げる。「実にペン、ネンネンネンネン、ネネム裁判長は超怪である。私はニイチャの哲学が恐らくは裁判長から暗示を受けてゐるものであることを主張する」。こ

の言葉を聞くと、みんなは「ブラボオ、ネネム裁判長、ブラボオ、ネネム裁判長」と叫びだす。取り巻きたちの口から連続して出てきたこうした甘い言葉には、さすがのネネムも打ち勝てない。ひょっとするとほんとうに自分の力は絶大で、自然すら自分の思うがままになるのかもしれない。自分は自然をものともせず、自らが自らの意志で自分の運命をつくり出していく人、「ニイチャ」の超人かもしれない。最初は半信半疑だったネネムもしだいに、その気になってくる。

ネネムはしづかに笑って居りました。その得意な顔はまるで青空よりもかゞやき、上等の瑠璃よりも冴えました。

なにやらここでのネネム世界裁判長は、サン＝テグジュペリの『小さな王子さま』に登場する「小惑星 325」の王さまのようだ。この王さまは命令することが大好きなのだが、その命じ方は、たとえば大きな暦で今日の夕日が出る時刻を前もって調べ、ちょうどその時刻になると、やおら夕日に出るように命令するというたぐいのものだった。まるで命令されて現れるがごとく、夕日が顔を出すという仕組みだ。ネネムも「小惑星 325」の王さまのように、ぴたりとあたる自分の言葉が、自然現象を計算で言い当てているだけのことだと知っていた。ただネネムが王さまと違うのは、王さまには家来が一人もいなかったのに対して、彼には多くの部下がいたということだ。この部下＝取り巻き連の甘い言葉によって、彼は自分のいま言った言葉もつい忘れ、ほんとうに自身の計算を「神聖な裁断」だと信じかけてしまう。

「みんなのブラボオの声は高く天地にひびきわたる。折しも、2 回目の爆発が起き、爆風が吹いてくるのだが、その風は偶々、ネネムたちの方には向かってこなかった。このことがネネムとみんなの頭を狂わせる。この最後の突き押しで、「僕の計算」は単なる「僕の計算」ではなくなってしまった。その時のネネムの傲り高ぶる心中を語り手は次のように伝えている。

それから風がどうっと吹いて行って、火山弾や熱い灰やすべてあぶないものがこの立派なネネムの方に落ちて来ないやうに山の向ふの方へ追ひ払ったのでした。ネネムはこの時は正によろこびの絶頂でした。

風がネネムの方に吹かなかったのは、風の意志ではなく、その場の偶然であろう。しかし、ネネムは 30 人にのぼる取り巻き連のかもしだす異様な空気に吞まれ、風は＜超人＞である自分を守ったのだと受けとった。空気に吞まれたのは、登場人物たちだけではない。ばけものの語り手までが、中立の立場を捨て、神がかったネネムの力を信じるようになったらしい。まさに途方もないナンセンスとしか言いようがない。

有頂天になったネネムは高揚した感情を抑えられなくなり、「とうとう立ちあがって」、＜偉人伝＞としての自身の過去を高らかに歌い上げる。森の中で苦勞して昆布取りをしたこと、自分は「フウフィーヴォ博士の弟子」で、博士は「おれの出した筆記長をあくびと一しょにスポリと呑みこんだ」こと、妹が奇術師のテヂマアのもとでスタアになっていたことなど、いくつかのエピソードが人生の頂点である＜今＞の視点から語られ、最後はこう締めくくられる。「いまではおれは勲章が百ダアス／藁のオムレツももうたべあきた。／おれの裁断には地殻も服する／サンムトリさへ西瓜のやうに割れたのだ」。ばけものパンから燕麦に移り、博士しか食べるのでなかった「藁のオムレツ」まで食べはじめたが、もうそれも食べ飽きたと豪語する。その心の傲りが、「おれの裁断には地殻も服する」という、とんでもない錯覚を生み出した。＜自伝＞披露のあとも、ネネムの舞い上がった気分は収まらない。最終的にはすでに述べたように、自身を「オキレ」（太陽）と同等と見なし、部下たちも次のように歌う。

フィーガロ、フィガロト、フィガロット。／ペンネンネンネンネン・ネネム裁判長／その威オキレの金角とならび／まひるクラレの花の丘に立ち／遠い青びかりのサンムトリに命令する。

ネネムも狂乱の態で、「踊ってあばれてどなって笑ってはせまは」る。そ

の時だ、「はづみ」で足が「少し悪い方にそれ」、人間の世界に「出現」してしまうのは。

ネネムはこれまで出現罪で裁く側のトップの人間であったにもかかわらず、自身が「ばけもの律」を犯し、出現してしまった。泥棒を捕まえる警察官が泥棒したようなものだ。今度は、自分が裁かれる者になる。出現した今も世界裁判長であり続けているとすれば、彼は「妄りに」だの、「故なくして擅に」だの、法律用語を駆使して、自分で自分の罪を裁かねばならない。

しかしどうしてネネムのような立場にあるばけものが、出現してしまったのだろう。ネネムは「単なる」不注意で踏み外してしまったとみる評者もいるが、たとえ不注意だとしても、その不注意はまったく、常軌を逸したものである。彼は権力意識が生み出す酔いによって足を踏み外した。この酔いに浮かれて足を踏み外すのは、「単なる」不注意などという言葉では言い表せない。

「北守將軍と三人兄弟の医者」では、賢治は將軍にこう言わせている。
「おれを誰だと考へる。北守將軍ソンバーユだ。九万人もの兵隊を、町の広場に待たせてある。おれが一人を待つことは七万二千の兵隊が、向ふの方で待つことだ。すぐ見ないならけちらすぞ」。＜私とは誰だ、私とは何者だ＞という問いかけこそが、両物語を突き動かす原動力となる。「ネネムの伝記」では、ネネムの＜私＞は「飢饉の時の森の中の子供」や「森の中の昆布取り」であるうちはまだちっぽけなものであったが、世界裁判長、地殻をも動かせる自然の征服者、太陽に匹敵するものというように急激に膨れ上がってゆく。この＜私＞の権力意識は結果的には取り巻き連の持ち上げによって顕在化したのであるが、その意識を育てる苗床のようなものは、じつは、ネネムが立身出世する前にすでにできあがっていた。

ペンネンネンネンネン・ネネムはお金を払って店を出る時ちらっと向ふの姿見にうつった自分の姿を見ました。／着物が夜のやうにまっ黒、縮れた赤毛が頭から肩にふさふさ垂れまっ青な眼はかがやきそれが自分だかと疑った位立派でした。／ネネムは嬉しくて口笛を吹いてたゞ一息

に三十ノットばかり走りました。

規模は違うが、自分を「立派」だと感じるネネムがすでにここにいる。ネネムはいったい、自分の立派な姿にどれほど喜んだのか。その程度を感じとるために、数をめぐる賢治の遊び心にしばし付き合ってみよう。

ネネムはうれしくて一息に「三十ノット」走ったとあるが、「三十ノット」とはどれくらいの距離なのだろう。このノットが時速一海里（1. 852 km）の意味で使われているとすれば、55.56 kmほど走ったということになる。この距離を走るだけでもすごいことだが、ばけもののことだ、そんなことはあたりまえなのかもしれない。しかしネネムはその後、「一時間と六分かかって、三ノット三チェーンを歩」いたとされている。1 測鎖が 60 フィート（20.117m）とすれば、3 ノット 3 チェーンは、5616m36 cmで、それを 1 時間 6 分かけて歩いたのだから、「三十ノット」=55.56 kmを歩くのには、約 10 時間 52 分かかかる計算になる²⁸⁾（ああ、ややこしい！）。この間、「口笛を吹いてたゞ一息」に走り続けたことになるのだ。と、このように生真面目に計算してみると、ネネムが自分の立派な姿にどれほど喜んだのかがよくわかる。

もちろん、自己の容姿の立派さにほれほれしているネネムの姿はほほえましくもある。若さゆえということもあろうし、自分にほれほれしたかといっすぐさまどす黒い慢心へと突き進むわけではない。しかし、この染みのような小さなうぬぼれがなければ、慢心が頭をもたげてくることもなかったはずだ。ネネムは、この誰にでも可能性のある自尊心の道を通して（そのスピードは漫画的ですからあるが）、ばけもの界の戒を破る「出現」にたどりつく。

誰にでも可能性があるといえ、ずっと気がかりであり続けたことが解決してしまう「安心」もそうだ。時折の安心がなければ、エネルギーの補填が不可能になるし、安心のない生は生き通すのが難しい。また、取り巻き連の持ち上げに毅然として、世辞を言うなど言える人間がそう多くいるとも思えない。一人から二人、さらに増えて三十人と、身近にいる部下がいっせいに自分を賛美するようになれば、その力に抵抗できる者はそう多

くないだろう。「ネネムの伝記」は一見、異様なものに見えるかもしれないが、笑いの向こうに目をやれば、案外、ふつうの伝記に見えてくる。「出現」に向かうばけものの弱さを描きだしたこの伝記は、多くの弱い人間の、あたりまえの＜伝記＞になりうるのだ。あるいは、あたりまえの＜我々の伝記＞として読まれることを賢治も期待していたのかもしれない。もちろん、笑いながらではあるけれども。

注

- 1) 本論文の題名を「笑う賢治(2)」としたのは、本論が拙稿「笑う賢治—『北守将軍と三人兄弟の医者』をめぐって」(『論攷宮沢賢治』第14号、2016年、3月)のテーマを引き継いでいると考えたからである。
- 2) 博士の名はフウフ_ヰウボオ、フウフィーボー、フウフィーボオ、フウフ_ヰイボウ、フウフ_ヰイボウ、フウフィーヴオと、さまざまに表記される。これは作者の単純な表記違いではなく、変形自在なばけものの特徴を示しているのだろう。
- 3) 佐々木ボグナ『宮沢賢治 現実の遠近法』京都大学学術出版会、2013年、33-51頁(第一章「『奥』の世界」)を参照。
- 4) 『新校本宮沢賢治全集』第8巻、校異篇、筑摩書房、1955年、141-142頁を参照。
- 5) 同上、142頁。
- 6) 三浦正雄「＜ばけもの世界＞と＜出現罪＞の謎—『ペンネンネンネンネン・ネネムの伝記』考—」『近代文学研究』第9号、1992年6月、37頁。
- 7) 『新校本宮沢賢治全集』筑摩書房、第15巻上巻、57頁。
- 8) 塚本春奈「宮沢賢治「ペンネンネンネンネン・ネネムの伝記」—賢治が求めた＜異世界＞との交信—」、熊本女子大学国文談話会『国文研究』第63号、2018年9月、26頁。
- 9) 詳細は、以下の拙稿を参照されたい。「想像力への挑戦—賢治童話における形の問題」、中四国宮沢賢治研究会『論攷宮沢賢治』第15号、2017年。
- 10) その詳細は拙著『宮沢賢治とは何か—子ども・無意識・再生』(朝文社、2014年)第四章を参照されたい。
- 11) 谷川恵一「啓蒙の文法」(『教科書 啓蒙文集 新日本古典文学大系 明治編11』岩波書店、2006年、所収)、636頁。
- 12) 山田兼士「ペンネンブドリの肖像 未然の父性をめぐる一考察」、洋々社『宮沢賢治』第8号、1988年、72頁。
- 13) 別役実『イーハトーボゆき軽便鉄道』白水社、63-64頁。
- 14) 強調は筆者。以下、断りのない場合の強調は筆者のもの。
- 15) 引用は、福沢諭吉『学問のすゝめ』岩波書店、1994年、12頁、に拠る。『学問のすゝめ』の最初の出版は1872-76年。
- 16) 三浦正雄「＜ばけもの世界＞と＜出現罪＞の謎—『ペンネンネンネンネン・ネネム

の伝記』考一」、41 頁。

17) 同上、11 頁。

18) ノアにとって自身の箱舟に乗せることは、まさに選別することであった。ここではフッフィーボー博士による選別が示唆されているのではないか。ちなみに原子朗『定本 宮澤賢治語彙辞典』（筑摩書房、2013 年）では、「セム」は「世界裁判長ネネム」の略の可能性があるという。

19) たとえば、谷本誠剛『宮澤賢治とファンタジー童話』北星堂書店、1997 年、101 頁、を参照

20) 引用は、カント、波多野精一他訳『実践理性批判』岩波書店、1979 年、317 頁、に拠る。

21) 同上、318 頁を参照。

22) ちなみに、賢治は「銀河鉄道の夜」の初期稿でブルカニロ博士に言わせている言葉、「もしおまへがほんたうに勉強して実験でちゃんとほんたうの考とうその考を分けてしまへばその実験の方法さへきまればもう信仰も科学も同じやうになる」は、明らかに『実践理性批判』の「結語」の一部を踏襲している。—「しかし今度の場合は数学は使用できないから化学に類する手続を用いて、これらの概念に含まれていると思われるところの経験的なものを理性的なものから分別する。こういう実験を普通の人間悟性〔常識〕について繰り返し試みることによって、経験的なものと理性的なものとはそれぞれ純粋に、またそのおのおのがそれ自身だけで成就し得るところのものがなんであるかを確実に知ることができる」（同上、320 頁）。「ネネムの伝記」では茶化されているが、賢治にとってカントは単に戯画化するだけの対象ではなかったようだ。その関りについては再考の必要があろう。

23) この第一章の章題は「慣用に従った仮題」とであるとされているが（『新校本宮澤賢治全集』第 8 巻、校異篇、138 頁）、全体の章題の付け方から見て、妥当なものだと思う。

24) ここでの強調は作者のもの。

25) 飯田泰三『大正知識人の思想風景—「自我」と「社会」の発見とそのゆくえ』（法政大学出版局、2017 年）、第三編「人格主義・文化主義による文明批評」（139-175 頁）を参照。ちなみに「よだかの星」では鷹は、自分とよだかの間に歴然とした人格の差があるとみなして、こう主張している。—「お前とおれでは、よっぽど人格がちがふんだよ。たとへばおれは、青いそらをどこまででも飛んで行く。おまへは、曇つてうすぐらい日か、夜でなくちゃ、出て来ない」。

26) 用語の引用はニーチェ著、氷上英廣訳『ツァラトゥストラはこう言った』岩波書店、1967 年、37-40 頁に拠る。

27) たとえば、元請けの下請け、孫請け、ひ孫請けあたりが安い賃金で働かされるというような連鎖の構図は、明治以降の日本でも、数多く見られるのではないかと。

28) この計算では「チェーン」を測鎖の標準的な長さとしているが、1 チェーンを 1 ノットの百分の一と見なせば、また別な時間が出る。その場合でも、ネネムが 10 時間以上一息で走ったことに変わりはない。

*賢治作品からの引用はすべて、筑摩書房版『新校本宮澤賢治全集』に拠る（ただし、ルビに関してはこの限りではない）。